
神様代行

黒枝 庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様代行

【Nコード】

N2108Z

【作者名】

黒枝 庵

【あらすじ】

人には言えない家業を両親から継いだ兄の京一郎と妹の麻理。いつものように仕事をする毎日のある日、彼はとある大規模な戦争に足をつっこんでしまう。

そこで出会った銀髪の少女、レイナリアの仕事に協力することになったのだが…京一郎に課せられた仕事は極めて厳しいものであった。

真夜中のお仕事

彼はいつもの様に日付が変わる前には布団を被り、自分のベッドで丸くなっていた。

今日はしばらく放置していたままのレポート課題の為に一日を使ったので、倦怠感に苛まれての就寝だった。

真夜中過ぎの丑三つ時、

「馬鹿兄貴！ようやく尻尾を掴んだよ！」

とかなんとか言いながら扉を勢いよく開けて入ってきたのは、温かそうな防寒具に身を包んだ彼の妹だ。

ベッドまで一直線に来ると、その小さな手で叩き起こされる。布団を剥がされ、彼の身体は更に小さくなった。

寝巻にしている甚平の上に丹前を羽織わされ、車の鍵を手渡される。どうやら車を出せということらしい。まだ眠い。

車庫から車を出し、半ば強制的に普段は来ない隣の町まで赴いた。半分寝ながらの移動。時間が時間だったのだが、事故を起こさなかったのはこれ奇跡だろう。途中、なんだか意識が落ちかけたのだが、その都度助手席に座る彼女のビンタが飛んできていた。

そうして着いた先は、近くの駅から少しだけ離れたビジネス街の裏路地。その最奥にある廃れた建物の前。

敷地のすぐ外に車を止め、そこで彼はなぜか建物の一階にある小さな窓ガラスをこれから叩き割ろうとしているのだった。

窓はやや高い所にあり、普通では届かなかったたので車のトランクから脚立を持参しての作業である。

それでも少し背伸びをしないと届かなかった。

脚立に登り、ガムテープを人様の建物の窓に貼りまくる二人組。
こんな不審者、お巡りさんが通りかかったらまず間違いないくしょっ
ぴかれること請け合いだろう。

「ふあ…あ」

眠気を噛み殺しながら、ダッシュボードにあったガムテープを窓
に何重にも貼り、拳で音を立てないように丁寧に砕いていく。

それでも数センチほどの破片が建物の内側落ちてしまい、静かな
夜には十分響いた。

『つiiiiiiiiい！兄貴の下手糞！もつと静かにやってよ！こんなこ
とでせつかくのデビュー戦がおじゃんになったらどう責任取るつも
り！』

隣で彼の作業を見ていた妹は、彼の使っている脚立に数回蹴りを
入れた。

『…ったく、注文の多いやつだな。素人にこれ以上の手際を期待し
てどうしようってんだ。文句があるなら自分でやれよ』

汚いながらもなんとか割れた穴に腕を突っ込み、手探りで鍵を開
けて窓を開けた。

窓枠を両手で掴み懸垂の要領で窓から中を除く。道中で妹から聞
かされていた通り、ただの倉庫かなにからしい。

『あ、あのさ…兄貴？一人で見てないで私にも見せてよ。私じゃ脚
立を使ってもそこまで届かないから…あの、えっと』

『—ん？どうした。只でさえ大きな声で話せないような状況だっ
ていうのに、そんな囁きじゃ聞こえないぞ。届かないから…なんだ

「ほれ、言ってみる。“お兄ちゃん、抱っこして下さい”って言うてみる」

「くうううう！下手に出れば調子に乗って！バカ兄貴！！」

地団太を踏みながら、更に罪なき脚立に蹴りを入れる。

ふくれっ面が少し可愛い。小声だったのも忘れて顔を赤くしている。

『ほれほれ、どうした？』

「い、いいからさっさと抱き上げやがってください！この、この鬼！」

これ以上虐めると後が恐い。そう判断して彼は妹弄りを切り上げた。

儘なお姫さまの、ふわふわなダッフルコートの脇の下に手を入れて軽い身体を持ち上げてやる。

「ば、馬鹿、顔は上げないでよ。コートの下まだ制服なんだからね」「わーってるっての。俺だって妹のお子様パンツなんてみたかねえ」

直後、ローファアの踵が頭頂部を踏みつけてきた。痛い。

「んー、この隙間じゃ兄貴は入れないよね。私が中から表の鍵を開けてくるから表に回って」

「おう。気を付けろ、慎重にな、ヘマするなよ」

頭を擦りながら答えると、亜紀は少しムスツとした表情のまま建物の中に入っていった。

お年頃の娘が気にしている、少々小柄な体型を十分に活かして持っていたブツと一緒に器用に窓枠を通り抜けていく。

彼は路上に駐車したままの車のトランクに脚立を放りこみ、鍵の掛かっていた表の入口側へと来た道に戻っていった。

それほど大きな建物ではない。急ぎもせず、のんびりもせず、通りから表の入口に着いた時にちょうど入口が開けられた。

いや、鍵が開いたというより、真つ二つになつた扉が彼の横をもの凄い勢いでぶつ飛んでいくという状況だ。

「おい…隠密とやらはどうした。最初からその腰のモンで鍵ごとぶつ壊したほうが早かつたんじゃないの？」

「そんなことしたらブービートラップでお終いだつてば。裏側から壊されるより表側から壊されることを想定されて作られてるんだから、私達みたいなのが触れただけで一発アウト。それに思ったよりも魔術的トラップが多かつたから、“これ”で一氣にブツ壊したの」

少女は左手に持っていた一風変わった刀を、急いでコートの下に隠す。

彼も妹の豪快な性格は熟知していたので、これ以上責めるようなことはしなかつた。

「ま、それなら時間も惜しいしブツ壊すしかないな。それで、中はどんなもんよ？」

「…いるよ、確実に。今夜は今までのようにどっかの同業者に先を越されずに済みそう。ヤレるなら、今夜で終わりにしたほうがいいよね」

「まあな、逃がすと後が面倒になる」

彼も妹に続いて懐中電灯片手にビルの中へと入って行く。

建物の中は外と同じで、アスファルトが剥き出しになっていたり崩れかけている箇所も多々見受けられた。外の見た目以上に荒れている。

「いかにもって感じだな」

こんな、日中も日陰になるような陰気なところに好き好んで来るような者は普通いない。

人の目から隠れられ、誰か人間が来たとしてもそれを阻む表の鍵。ここまでしていてもイナイ、だなんてことはありえない。自分の保身の為に神経質になっていたからこそこうして住処を発見できたとも言える。

「うつ…」

少女が突然両手で鼻と口を押さえた。奥に進むにつれ、鼻が異臭を捉えたのだ。彼も険悪な表情を浮かべる。何度も嗅いだ事のある、あの独特な腐敗臭。慣れている彼でさえ鼻を押さえた。

「…臭いと思ったら、こりゃ」

そこは一階の一番奥の空間だった。恐らく男女共用のトイレか何かだったのだろう。

しかし、二人とも部屋の中に入る気にはなれなかった。

「…ひどい」

三個ある個室からは暗いなかでも一際目立つ黒が溢れていた。きつと、ここはゴミ箱なんだ。

もう必要のない食べ残しを捨てる生ごみのゴミ捨て場。白を基調としていたであろうタイル張りの床や壁は赤黒く染まっている。

目の前の光景を見た二人は言葉を失っていた。

「どうする？お前は車に戻ってるか？辛かったら俺一人でいくぞ」
「馬鹿言わないでよ。私だってもう一人前なんだよ。いつまでも兄貴のサポートなんて御免だから。ましてや、こんなもの見せられて逃げるなんてできない」

「…そうかい、それじゃあ二階に上るぞ」

ゴミ箱の傍の階段を上がり、二階の踊り場に到着。

三階へと続く階段は、どうやらかなり前に封鎖されているらしくてこれ以上は登れなかった。

いるのならば、ここだ。

二階にあるのは一つの大きな部屋だった。階段の正面にある一つの戸。恐らくその部屋がこの二階全てを占めている。

二人で両開きの戸を開けると、そこには背広姿の男が一人隅の方で蹲っていた。

部屋の造りからして、以前は何かの会社でも入っていたのだろう。しかし今は何もない殺風景な空間が広がっていた。

すべての窓には隙間なく目張りがされ、少しの月明かりも入らない。まるで別世界に思えた。

部屋に二人が入った途端、男は俯いたまま身体を大きく振るわせた。

「俺じゃない…俺は何もしてない…俺じゃない…俺は何もしてない…俺じゃない…俺は何もしてない…俺じゃない…俺は何もしてない…俺は…」

男はブツブツと、壊れたレコーダーのように同じ言葉を繰り返している。

「おい、あんた」

男の傍まで近づくと、蹲っていた男はゆっくりと顔を上げた。頬は骸骨のように痩せ細り、顔は青ざめている。見た目は四十代半ば、どこにでもいそうな普通の中年男性だ。ただ、その目には生氣がまるでなかった。

「こいつ…」

彼の少し後で少女は腰の得物に手を掛けている。

「…誰だあんたら…アイツらの、仲間か…？」
「アイツらって、どいつらだよ」

男の的を得ない内容の発言。

どうやら二人を誰かと勘違いしているらしい。

男はまるで興味を無くしたのか、二人から視線を外してまた自分の世界に戻って行ってしまった。

「…俺は何処で間違えた…言われたとおりのことは…した…それなのに…なんで治まらない…なんで止まらない…なんで…」

目の前まで来てようやく気が付いた。男の身体が小刻みに震えていることに。

「…麻理^{まり}、覚悟しとけよ」

「ふ、ふん！馬鹿兄貴こそ。私に手柄を取られて泣かないでよね」

彼、月村京一郎^{つきむら けいいちろう}は甚平の帯に挿していた短剣を引き抜いた。妹の麻理の持つ『刀』同様、およそ『剣』と呼称していいのかどうかは

定かではない。

両刃を持った刀身三〇センチ程の剣と、大きく反った刃を持つ刀。

二人の持つ武器は、およそこの世の常識では考えられないもので洗練されていたのだ。

狩人の生き方

徹夜明けの朝食は、味がイマイチ解らない。

味気ないインスタントコーヒーのおかわりを注いだ京一郎は、使い古されたソファ―に腰を落ち着けた。

洗い物も済ませ、これで朝の家事もひと段落といったところである。

時計を見ると、麻理の登校時間まで一息つけるだけの余裕はあった。

「…あー、ねみい…」

昨夜のお勤めを終えたのがだいたい朝の4時くらいだ。そのお勤めに思ったよりも時間が掛かってしまったのがこの眠気の原因。

なんだかんだと後始末を終え、オンボロアパートに帰ってこられたのが日の登り始めている6時ごろだった。

こうして睡魔と格闘しているのも辛いが、一度でもベッドに沈んだら昼過ぎまで寝ていられる自信が京一郎にはある。

近くに放り出されたままのリモコンを取り、テレビの音量を少し下げた。

付けっぱなしのニュースでは、最近巷を騒がせている失踪事件が特集を組まれ放送されている。

はつきり言つて、まったく興味が無い事だけに目覚ましとしての効果は薄かった。

何かやり残したことは無いかと天井を見ながら考えるが、特に思い浮かばなかった。

ふと、ベランダに干した洗濯物と鈍よりとした空を見る。

「少し曇ってるけど、雨は降らないらしいし…でも洗濯物乾かないから嫌な天気だな」

欠伸を一つ。

テレビの天気予報は、4月も半ばだというのに関東圏全域でまだまだ寒さが続くと言っていた。真冬の寒さよりは全然マシだが、まだまだ肌寒い。コートやマフラーを押し入れの奥に突っ込むのは無少し先になりそうだ。

「このぐうたら兄貴はなにおばさん臭いこと言ってるんだか」

朝風呂を済ませ、学校の制服に着替えた麻理がやって来た。

高校のブレザーの上にコートを着て、マフラーも装備している。

少し長めで茶色の癖っ毛はまだ少しだけ湿っていた。目に掛かるくらい長い前髪は左右に分けられてピンで止められている。

「うるせえ。俺は午後からだからそれまでに洗濯物が乾かないと取り込めないだろ」

「いいなー大学生は。好きな時間に学校行けばいいんだもんね」

京一郎は地元の大学に今年から通ってる大学一年生だ。そして麻理は彼の通う鳥之石大学の附属高校に通う二年生。

「お前も後二年すればこんな生活が出来るさ。進学はするんだろ？」

「うん、まあ特待生で行ければね」

奨学金を貰って大学に通っている京一郎とは違い、亜紀は頭がいいので今も高校の学費は免除されていた。

何事もなければ大学でも授業料免除で通えるだろう。
亜紀は少しだけ物思いにふけりながら、視線をテレビの方に向ける。

「これって」

これとは、ニュースで流されている失踪事件のことだ。

「この三週間だけで千人近い行方不明者、それもかなりの広範囲だ。流石に只事じゃないからな、誰でも異常に思うだろうさ」

ただの失踪じゃない。それは京一郎も麻理も知っていた。

解っているだけの失踪者でこれだけなのだ。つまりはそれだけの人数が警察に届けられたことになる。人知れず姿を消した者もいるだろうから報道されている以上の失踪者がいるのは明白だ。

真相に関して、多くの憶測や噂はあるものの未だに明確な解決への糸口は見つからず、警察の捜査は難航しているらしい。

「昨日の人喰い^{マンイーター}も事件に関わってるってことだよな」

「だろうな。直接的な関係があるかどうかはもう問い質せはしないが」

「それにしても昨日の人喰い、最初はてっきり魔法使いの類かと思っただよ」

肩に掛かる程度に切り揃えられたボーイッシュな髪を弄り、ニュースを見ながら呟く麻理。

時計はそろそろ7時20分を周るところだ。

「ああ。人肉喰いの化物のくせに、肉には一切手を付けてなかったからな。奴だけじゃない、どうも最近では化物共の行動が奇怪だ」

「なんか様子も変だったしね…っ」と

麻理は壁掛け時計を確認すると、ソファーから立った。

「そろそろ行く時間か？」

「うん、明日華あすかが来ちゃう」

ソファーから飛びだすと、慌ただしくリビングを出ていく。

「今朝はいつもより早いんじゃないか？なんかあんの？」

「今朝は朝礼で報告があるからね、その準備が少しだけ」

真面目な妹はこれでもかと毛糸の手袋をし、寒さ対策はこれでもかと言わんばかりにバッチリだった。壁に立て掛けている通学カバンを取って玄関へ。

廊下に出ると、丁度玄関の戸をノックする音がした。

『麻理ちゃん？そろそろ行かないと。生徒会のお仕事あるんでしょ？』

声の主は下の階に住む兄妹二人の幼なじみであり、亜紀と同級生の佐井明日華さいあすかだった。

「おーう、明日華か、今行くから待ってる！…生徒会長様も大変だな」

ロファアを履きながら、最後の身だしなみをチェックする亜紀は苦笑いを浮かべる。

「まあね。でも失踪事件についての注意を呼び掛けるくらいは別に苦じゃないし、みんなを少しでも危険から遠ざけられるならなんてことないよ。それじゃ、いってきまーす！」

玄関を開けると、亜紀と同じ様に格好に耳あてまでしている明日華が寒そう身体を小さくして立っていた。

「おはよー明日華」

「おはよー。京にいまおはよー」

「おう」

外からの寒風に鳥肌が立つ。温かい室内が一気に冷えた。

「気を付けていけよ」

「うん。でも京には私達より、まずお姉ちゃんと仲直りできるかどうかの心配をしたほうがいいかもね」

「…っ」

明日華の痛い発言に、京一郎は心底嫌そうな顔をしてみせた。そんな兄の情けない表情を笑いながら、小悪魔二人の後姿は集団登校をする小学生達の中へと消えていく。

鳥之石市内にある全学校は、先週くらいから登下校時に決して一

人にならないように、このことで集団登下校を強制している。物騒な世の中だからこそ、安心して子供を学校に行かせられない保護者が生徒達に同行しなければならぬのだ。

麻理を送り出した後、彼はもう一度灰色の空を見上げる。

「洗濯物は諦めて、俺も大学いくかな」

今日の講義は昼からなので、今から行っても4時間くらいは時間が空いてしまう。大学までは歩いて30分ほど、原チャリでも10分かそこらで着いてしまう。

しかし家に一人していると寝てしまいそうだったので、それならば多少騒がしいところに行ったほうがいだろうという結論に達した。身支度を済ませ、麻理達に遅れること30分。京一郎もゆったりとした足取りで大学へと向った。彼が外に出た時には登校時間のピークをとくに越えていたので、アパートの前の通りはがらんとしていた。

だから周りの勢いに急かされることもなく、麻理達も通った道を一人進む。

そんな徹夜明けで憂鬱な一日が、今日もまた始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2108z/>

神様代行

2011年12月25日19時46分発行